

言葉の耳袋 (3)

海外・帰国子女教育専門機関 JOBA 顧問 教育アドバイザー
張江 幸男

滞在期間の長短にかかわらず、海外に住む子ども達への日本語の教育は保護者にとって大きな問題です。このコラムでは、海外・帰国子女教育の大ベテランが「海外での日本語教育」へのアドバイスを語ります。

(5) 絵本で育つ親

NY日本人学校で、小学1年生を受け持つある先生が、学級で子どもと親の絵本調査をしました。子どもには「親に読んでもらった絵本」、親には「子どもに読んであげた絵本」をそれぞれ短時間で書いてもらいました。さーて皆さんは、どちらが沢山書いたと思いますか。

子どもは案外絵本の名前を覚えていませんでした。親は多くの書名を挙げました。これは、子どもが忘れたのだろうか、はっきり書名を聞いていなかったのでは、という意見もありました。

しかし、私はそうは思いませんでした。子どもの心の中に、そのときの絵や、ぼんやりしたあらすじは残っています。親の読み聞かせたときの表情や語調まで、はっきりと残っています。甘い慕情と一緒に、生涯忘れられない一刻を共有したことははっきりしているのです。それは、テーマやストーリーを超越したものなのです。

ところで、親のことです。いまの、この子どもに、どんな本を読んであげようか。選ぶ段階から考えます。自分が自分のために選んだときより、はるかに無意識に真剣になっています。自分の幼少時代から、いろいろな教育や体験を経て、いま、だいたい子どもにこのような絵本を読んであげたいと思ったのです。

- 1、子どもの好ましい発達にとって、子どもの心の働きをいきいきとさせ、生活を楽しく豊かなものさせてくれる絵本
- 2、興味と感動のある絵本の喜び体験を通して、自分たちを取り巻く自然・社会と生活に関する、健康な好奇心と正しい認識を日ごと深めてくれる絵本
- 3、美的表現に対する共感と親愛の情を深めてくれるような絵本

親は、毎日、このような願いを込めて読み聞かせています。いいえ、祖父母もそうです。同じ本を、同じページを何回も読み聞かせます。その回数は、一日一回として、1年365回。乳幼児時代であれば、もっと数字は大きくなるのです。

5歳までとして1825回。子どもと一緒に楽しさを共有し

ながら読みます。本を読んでいる瞬間、人は誰もが心豊かな人になっているのです。感情を移入し、子どもに届けと願いながら読んでいる親は、書名も、ストーリーも、訴え来る情感も、強く迫ってくる美しさへの感激も知らず知らず、子どもと共有しているのです。勿論、書名もはっきりと覚えていきます。

そうです、親は子どものお蔭で人間として愛の体験を二度も持つことが出来たのです。

落合恵子さんは「絵本は子どもから始まって、上は年齢制限のないメディアです」と言っております。さあ、今宵も子どもに絵本を読んであげましょう。

(6) 忘れられる宿命と甦ってくる運命

ある絵本研究会で20～30代を対象に「幼児・幼年期における私の思い出絵本3冊」というアンケートをとりました。結論は前期の結果と同じでした。それでも、浮かび上がってくる傾向があります。

- ☆ <むかしばなし>とか<名作>と言われるものは、どんな優れた内容の新作絵本も、太刀打ちできない。
- ☆ 新作も親子の共感から3代目へと甦るものがある

(7) 楽しまれ方好まれ方喜ばれ方

- ☆ 食べ物が出てくるところ、家族、友達と一緒にたべている場面が楽しかった《ぐりとぐら》
- ☆ 自分の欲求願い・憧れなどの気持ちが満たされた、爽快感とか充足感を抱いた思い出《ひとまねこざる》
- ☆ 静かに沈潜した気分で、ひとときを楽しんだ《私と遊んで》
- ☆ 喜怒哀楽の感情を激しくゆり動かされた《ねむりひめ》
- ☆ 不思議さが持つおもしろさに、胸のわくわくする好奇心と期待感があわだつのおぼえた《ももたろう・ちびくろさんぼ》
- ☆ 面白さの中で教えられるところがあった《大きなかぶ・三匹のこぶた》
- ☆ ことば表現の珍しさ・面白さとか、それを口にする心地よさが印象に残った《きかんしゃえもん・かにむかし》